

天使のわけまえ

空野閑人

彼女との距離感の場合、使っておしまいにできる贈り物の方が適しているだろうか。

名前さえ知らない同居人の話だ。人間かどうかですら定かではないけれど。

大学進学とともに住み始めたマンションの一室。僕の部屋には物言わぬ、天使のような存在が棲んでいる。華奢で小柄で、白い肌に白い羽を一對備えている人型のなにか。ひどい人混みに放り込まれようと埋もれないほどの異物感を放っているのに、他の人には見えていないなにか。それが、僕の生活の傍らにいる。

そんな得体のしれない存在との、同棲と呼ぶのもためらわれる生活が二か月ほど続いた。出会ったときの猛暑も二か月もたてば鎮まると期待したが、俄然、地球上の一切を黒コゲにする勢いだった。

いまだに彼女の方から言葉を発してくれることはなかった。何を求められることもないまま。その一方でさも当然のように家事を手伝ってくれていた。情けないことに、負担の割合でいえば天使の方が絶対に大きい。

思いやりの帳尻合わせだけでは足りないが、彼女のために何か贈りたい。彼女の行いに何らかの思惑があったとし

ても、助けられていることには変わりない。とにかく今日は、手土産を携えて帰ると決めていた。

エスカレーターに身をゆだねる。ショッピングモールを歩き交うひとは大体、幸せそうな顔をしているように見える。すれ違ったカップルなんてまさにそうだった。彼氏さんからだろうか、女性が手に提げていた紙袋に踊るロゴはジュエリーショップのそれだったハズだ。

アクセサリーも一度は考えた。首元にきらめきを添えた想像上の彼女の姿は、美しかった。魅力を感じないわけではなかった。しかし宝石や人形のような完成された、違った尺度の綺麗さを天使は有していると僕は感じていて、ならばどんな装飾品も蛇足に終わる気がした。それに、僕以外から視認されないのなら、その輝きは浮かべられない。

ふと、結婚指輪がなぜ指輪ではないといけないのか、それは頻繁に視界に入るからではないかと思つた。耳は自分では見えないし、首元を飾っても長さによつては見えづらい。その点、指はさつと見られるし、なにかに取り組んでいるときこそ目に入る。パートナーの存在を日常の中で強く感じられるから、指が選ばれたのだろう。

指輪だなんて。妄執にも似た考えを振り払うようにいくつかの店を通過し、食器を扱う店にたどりついた。百円ショップの無個性な品で揃えてばかりの僕の中には、



飾られた金色の蔦を眺め、なめらかな触感を楽しむように飲み口を指の腹でなぞっていた。そのさなかも言葉はない。けれど、その双眸に実に嬉しそうな色が滲んでいくように思ったのは、勘違いではないはずだ。

三日月のように上がった口角さえ確認できたとき、胸の奥で熱が湧き出した。安堵ではない、暴力的なまでの充足感だ。心が彼女の存在と同期しているような、錯覚に基づく多幸感。彼女を喜ばせようと手を伸ばしたはずなのに、その結果として与えられたあまりにも過剰な熱に、僕の方がたじろいでしまう。これでは帳尻を合わせるどころか、借金が増えただけではないのか。

彼女を幸せにすることが、そのまま自分を癒やすための手段になってしまうのなら。

そんな困惑を知ってか知らずか、彼女は大事そうにコップを胸に抱いたまま、立ち上がった。ふわりと裾を揺らし、軽やかな足取りでキッチンへと向かう。

カチツ、とコンロの火が点く乾いた音が部屋に響いた。覗き込むと、やかんが火にかけられていた。早速使ってみようということらしい。

彼女はキッチンに立ち、揺れる青白い火を眺めている。鼻歌まで聞こえたかもしれない。傍らには僕の一番好きな茶葉の入った缶が置かれていた。

窓の外では太陽が沈みかけ、ひとときわ鮮やかに空を赤く染めていた。夜の帳が下りれば、すこしは涼しくなる

だろうか。

いいや、変わらないだろう。むしろ逆だ。もう間もなく立ち上る湯気が、この奇妙で閉じられた世界の気温をどうしようもなく上げてしまうのだから。